

大学と遠隔地との地域連携教育の実践（2）

—文化学園大学「飯山地域連携プロジェクト」の教授学習過程とその検証—

Educational Practice of Community Education Programs Universities and Remote Locations (2)

—The Effectiveness of the Teaching-Learning Process of the "Iiyama Education Program Project" at Bunka Gakuen University—

山崎 裕子¹⁾、森谷 直樹²⁾、栗山 丈弘³⁾、田中 直人⁴⁾

Yuko Yamazaki, Naoki Moriya, Takehiro Kuriyama, Naoto Tanaka

要旨

文化学園大学 USR 推進室における活動の1つに長野県飯山市との地域連携があり、ここでは2010年度より学生の専門性を活かした教育活動を展開している。本研究では本稿（1）の報告における2011年度の活動のうち、本学コラボレーション科目として展開した教授学習過程に焦点化し、そこでの教材編成と授業の検証を目的とした。2010年度の活動を踏まえ、飯山における学習モデルの中からより合目的なプログラムを抽出するとともに、活動形態の授業化などいくつかの視点で教材編成を行った。それらの展開のち学習の成果や様子、授業アンケート、授業者による評価などを統合し授業全体の評価を行った。その結果、学生は授業参加そのものを肯定的に捉えており、学生にとって馴染みのない飯山の地域特性の理解が肯定的に行われたこと、地域特性の理解が作品のアイデアとして反映されたことが成果といえる。しかしながら、地域理解と地域課題の連続性での企画作りが不十分であったことによる学習のつまづきや、授業評価の方法として地域からの反応や評価などその対象を広げるべきことなどが課題として明らかになった。

●キーワード：教授学習過程（Teaching-Learning Process）／教材（Teaching Material）／カリキュラム（Curriculum）

はじめに

本稿（1）（「大学と遠隔地との地域連携教育の実践（1）—文化学園大学「飯山地域連携プロジェクト」の展開と可能性—」）では「飯山地域連携プロジェクト」における3カ年の活動を整理し、大学と遠隔地域との連携の在り方について述べた。そこでの知見として、1) 学生が実践共同体に周辺参加することが地域活性化の一助となること、2) 学部や学科を横断し多様な専門性を持つ学生が参加することが新たな価値を提案することに繋がること、3) 本連携プロジェクトの中期的な展望として構想カリキュラムⁱ⁾として地域資源を整理することが活動自体の持続性に繋がること等が明らかになった。それらの成果の一方で、学生の作品に対する飯山地域社会からの反応や評価、あるいは本事業による地域社会への影響など多方面でのアセスメントが課題となった。

本連携プロジェクトにおいて、その主体は学生の実践的な学びと地域社会に内在する課題との接合面にあると考える。その接合面こそが主に教師と学生と教材で構成される授業である。このような授業において柴田は「授

業の成否を決定するものは、第一に教材とその学習内容の研究である^{j)}と指摘する。換言すれば、教師が教材と学習内容ⁱⁱ⁾をどのようにデザインするかが問われているのである。したがって、そのような教材を通した学びの中で、学生が飯山の魅力や課題をどのように認識し、それを学生たちがもっている若者らしい発想力や行動力でどのように企画へと昇華させるかが肝要であり、その取り組みのプロセスこそが本連携の質を規定する。そこで本研究では、本稿（1）で詳しい論考を避けた本連携プロジェクトの2011年度の教授学習過程（本学コラボレーション科目ⁱⁱⁱ⁾「循環社会演習A 2011」、受講生：全44名、2011年5月～9月）に焦点を当てる。

本研究では1) これまでの到達点と課題に基づき、新たに編成した構想カリキュラムの中から、2010年度の活動を踏まえより合目的な教育内容を抽出し、そこから本学コラボレーション科目としてカリキュラム編成を試み、2) その展開としての教授学習過程を学習の局面および地域社会との関係のなかで複眼的に検証し、その有効性を明らかにすることを目的とする。

1) 専任助教 グラフィック・プロダクト 2) 専任助教 教育学・体育学
3) 専任助教 観光学 4) 専任助教 歴史学・博物館学

1. 教育目標

本稿(1)で述べたように、本連携プロジェクトの目標は長野県飯山市における地域貢献活動として学生のアイデアを活かした「地域の持続性」確保への貢献と、学生への教育活動としての「地域社会に対する問題意識と公共心の涵養」の2つにある。

これらの目標達成に向けて展開される活動は単一ではなく複数存在し、学内外で同時並行に展開されるなかで相互補完的な関係を持つと考える。また現在は活動の初期段階であるため、このような性質の目標を達成するには、今後多くの実践と省察による相互の積み重ねが不可欠である。

なかでも本稿で取り上げる2011年は活動の確立期と位置づけており、2010年度の課題の精査を起点とし、そこから本活動の中核となる授業基盤の安定化が必須である。そこで当該年度の活動目標の中で、本授業実践では以下の2点を教育目標と定め、年度目標達成に向けた中心的な役割を担うと考えた。

- ①概念的インプットおよび体験的インプットを通して、伝統文化・自然・食文化などに代表される飯山の地域特性を理解すること。
- ②自ら地域の課題を発見し、それを解決に導くコンセプトを含んだPR企画を提案すること。

2. 授業の内容および方法

本章では本実践における教育内容の構造化とそれを含み込む教材の特性を明らかにする。その上で、そこから編成される教材の構成と展開の方法について述べる。

2.1. 教育内容と教材

本研究における教育内容とは、本実践のようなデザイン学習において学習者である学生が認識し習得すべき教育的な価値を有する概念や技術などであり、その対象は多岐にわたる。そこで本研究では一般的な教授学習過程における教育内容の定義として支持されている高村による「人類の歴史的な実践の中でたくわえられた経験やその一般化としての科学的な概念や法則の体系」²⁾に依拠することとする。そのうえで本授業実践において学生が学習活動の直接的な働きかけの対象となる材料である教材を高村による「教育内容を正確になう実体として、子どもの認識活動の直接的な対象であり、科学的概念や法則の確実な習得を保障するために必要な材料(事実、

資料、教具)」³⁾に習いそれを首肯する。したがって本論では、学習者による教育内容の習得を補助する具体物として教材が位置づくことと捉え、教育内容と教材を明確に区別する。

前章で述べた教育目標を実現するために本実践において学生に身につけさせたい概念や技術を、学習局面を分節しながら下記のように教育内容として位置づけた。

事前学習(知る)

オリエンテーション：本連携プロジェクトの目的と教育的・社会的意義、2010年度の活動の成果。

概念的インプット①：映画で描写されている飯山の地域特性とそれに基づく地域理解。

概念的インプット②：地方都市の活性化からみる飯山市の地域理解。法政大学小島ゼミによる地域連携活動の到達点と課題、文化学園大学による地域連携活動との関係性および可能性。

現地学習(感じる)

体験的インプット①：人形作家の高橋まゆみが表現する世界の特徴(飯山市の風景や人物像、土地の空気感など)。

体験的インプット②：飯山市街地にある仏壇通りや商店街散策の歴史的・文化的背景、産業、今日の暮らしの理解。

体験的インプット③：それぞれのプログラムの体験による地域資源の価値、そこで暮らす人びとの交流による地域の人への理解。インプット内容と企画・作品の発想の結びつきやデザインすべき要素の抽出の仕方。モノ作りや発信による地域社会への影響の仕方。計画をより立体的に捉えるためにデザインの奥行きや現実感が及ぼす影響。

現地学習(企画する・提案する)

プランニング①発想の段階：自らの事前学習と体験学習での学習内容からの企画発想の仕方。4~5名の小グループによる共同作業を通じたブレインストーミングでの発想の広げ方と深め方。

プランニング②企画の段階：企画案の文書とその構成、表現方法の精査の仕方。より「共感」出来る企画書の作成の仕方。アウトプット①でのプレゼンテーションに向けた準備として、立案した企画を整理し、要点をまとめる等の工夫の仕方。

アウトプット①：自分の企画や考えを「伝える力」。他の受講生のプレゼンテーションを聞くことを通して自らの企画、コンセプトを批判的に捉え直す。地域の関係者からの意見を咀嚼し、企画のブラッシュアップに繋げる。

事後学習（企画する・提案する）

プランニング③ブラッシュアップ段階：アウトプット①での手がかりをもとに、企画や作品の造形表現などのブラッシュアップ必要な箇所の手直しを行うこと。
アウトプット②：PR企画コンテストに向けて自らの企画の核となるメッセージを相手に伝わるよう明確にすること。（ロゴ・お土産の場合）現実的な使用シーンを想定できるプレゼンテーションでの伝え方。

2.2. 教材編成

本節では本実践における教材編成にあたっての視点とそれに基づく教材の配列について述べる。

2.2.1. 教材編成の視点

ここでは2.1.で明らかにした教育内容を内包した教材を編成するにあたり、どのような視点で試みたのかを述べる。2010年度の活動を終えて、1) 地域特性についての理解不足、2) 成果物の形式に関する潜在的な限界の可能性、3) 学生のより幅広い参加の実現（単位化）などが課題であった。これらを改善しより良い実践とすべく以下の3点をもとに教材の編成を行った。

- 1) 飯山に関する事前学習や現地での体験学習をもとに体験学習^{iv}を起点としながら、自らの企画を立案できる学習の順序構造であること。
- 2) アウトプットの形式がお土産商品企画に限定されず、他のデザイン形式としてPRポスター・ご当地ロゴも選択可能とし、企画の幅を広げること。
- 3) 本学コラボレーション科目としての実施条件を満たした上で、学部・学科を超えた学生の幅広い参加（履修）が可能であること。

2.2.2. 教材配列

教材の配列に関しては、先述した教育目標と学習過程の局面に応じた教育内容から本研究独自の視点を持って構成した（表1）。そこでは各学習局面の特性と役割に応じた教材として、系統的な配列を試みた。また各教材

とも情報や概念、アイデアの言語化と視覚化を重視し、その後のリフレクションのしやすさを考慮し、計9種のワークシートを作成し積極的に活用した（図1）。

2.3. 授業の方法

本教材を展開するにあたり、その教授方法は飯山地域連携プロジェクト担当教員4名のそれぞれの専門性（造形、観光、歴史、教育）を活かしながらチーム・ティーチングを用い、授業展開に応じその役割を交代した。

また本授業の形式的な特徴としては、プロジェクト学習（PBL：Problem/Project-Based Learning）と呼ばれる「教育的に意味のある活動や経験を、学習者の自発性に基づく計画として学習者自身が企画・実行し、その過程において必要な知識・技能の習得を図る教育方法」⁴⁾と本実践を照らし合わせると、その性質を十分に有していると考えられる。一方、学生間の協同的な学び合いが「知る－感じる－企画する」までに留まり、「提案する」段階ではそれが保障されていないという点では、Gijbelsら^vによるグループ学習の概念とは異なるものである。

表1. 学習局面と教材の配列

局面・フロー	日程	内容	教育目標	教材配列
知る				
オリエンテーション	1 5月18日	授業の趣旨、地域活動連携活動について、スケジュール事前リサーチ課題の説明	授業内容、スケジュール及び地域連携活動についての理解	募集チラシ(授業全体の概略) 1外から見る飯山市の地域イメージについてのリサーチ 01 全体スケジュール表 02 この授業について(授業の概略) 03 事前課題リサーチ課題
概念的インプット①	2 5月25日	飯山学習 映画「阿弥陀堂だより」の鑑賞	メディアに取り上げられる飯山市のイメージを知り、地域理解を深める	
概念的インプット②	3 6月18日	法政大学との合同ゼミ 法政大学小島ゼミの学生とのグループディスカッション	飯山市及び地域連携活動についての理解を深める	阿弥陀堂だより鑑賞チェックリスト
	4 6月18日	法政大学との合同ゼミ グループディスカッションの結果の全体共有	自分たちの学んでいる専門分野を客観的にみつつ、地域連携活動における立ち位置を確認する。	
現地研修についてのオリエンテーション	5 7月20日	現地研修オリエンテーション 現地研修日程の確認、及び研修中の諸注意など	現地での研修内容やスケジュールに関する理解	現地研修のしおり (現地スケジュール、持ち物、諸注意、部屋割りなど)
	6 8月29日	移動 大学(新宿)→飯山市		
	7 8月29日			
感じる				
体験的インプット①	8 8月29日	現地体験 高橋まゆみ人形館見学 商店街散策	人形作家の高橋まゆみが切り取った飯山市の風景、人物に触れ、土地の空気を感じ、地域理解を深める 仏壇通り、商店街散策を通し、土地の成り立ち産業を知ると共に現地の様子を理解する	
体験的インプット②	9 8月29日	開講式 観光局とのミーティング	飯山市の立地や観光局の取組を知り、現状を理解し、企画立案のための足がかりとする	
課題についてのオリエンテーション	10 8月29日	課題のオリエンテーション ロゴマーク、ポスター、お土産などアウトプットコンテンツについての説明	アウトプットコンテンツに就いて理解し、参考事例やデザイン発想法を通し、企画立案に向けてのフローを理解する	04 課題シート 04-1 当地ロゴマークのデザイン課題の内容 04-2 PRポスターのデザインメディアの特性 04-3 お土産商品企画 デザインフローなど
体験的インプット③	11 8月30日	現地体験学習 伝統工芸体験… 彫金体験(飾り皿の装飾) 和紙置き体験(はかき) 職人との交流 伝統産業会館の見学	土地の豊かさ、地域資源を3つの体験を通して肌で感じ、また、地域の人々との交流を持つことで、企画・作品の発想の切り口や、デザイン要素の抽出を図る	06 活動記録ワークシート (活動記録を書き込むワークシート)
	12 8月30日	食と農体験… 農作物(野菜)の収穫体験 おやつづくり、そば打ち体験	また、モノを作り、発信することによる社会全体の動きや及ぼす影響など、「計画」としての「デザイン」を意識する	
	13 8月30日	自然体験… トレッキング体験 ネイチャークラブ体験		
インプットのまとめ	15 8月30日	体験のまとめ 現地体験のまとめ・振り返り	現地体験振り返り、立案に向けてのデザインソースを、ワークシートにまとめる	05 企画書ドラフト (企画案を書き込むワークシート) 06 活動記録ワークシート (活動記録を書き込むワークシート)
企画する				
プランニング① 発想の段階	16 8月31日	企画の発想 事前調査、体験活動を基に企画を発想する	自分の視点や新規性を大切しながら、モノの対象者や、対象者の気持ちを出来るだけ詳細に想像し、伝えたいメッセージ込めた企画を発想する	05 企画書ドラフト (企画案を書き込むワークシート) 06 活動記録ワークシート (活動記録を書き込むワークシート) 07 企画構想ワークシート (企画案をまとめるワークシート)
	17 8月31日			
プランニング② 企画の段階	18 8月31日	企画の立案 企画案の立案、デザイン画の作成	立案した企画の使用シーンや、より高い有効性を検討しながら、デザイン画の造形的表現も加味し、より「共感」出来る企画書を目指す	05 企画書ドラフト (企画案を書き込むワークシート) 06 活動記録ワークシート (活動記録を書き込むワークシート) 07 企画構想ワークシート (企画案をまとめるワークシート)
	19 8月31日			
プランニングのまとめ	20 8月31日	企画のまとめ 翌日の企画案プレゼンテーションの準備	立案した企画を整理し、要点をまとめ、自分なりに工夫したプレゼンテーションが出来るように準備をする。	07 企画構想ワークシート (企画案をまとめるワークシート) 08 プレゼンテーションワークシート (発表内容を整理するためのワークシート)
提案する				
アウトプット①	21 9月1日	企画案プレゼンテーション 観光局の方、商店街組合の方を招いての企画案のプレゼンテーション。	自分の企画や考えを「伝える力」を養うと同時に、他の人のプレゼンテーションを聞くことにより自分の企画、考えの振り返りを行う	07 企画構想ワークシート (企画案をまとめるワークシート) 08 プレゼンテーションワークシート (発表内容を整理するためのワークシート)
	22 9月1日			
	23 9月1日			
	24 9月1日	移動 飯山市→大学(新宿)		
	25 9月1日			
企画する				
プランニング③ ブラッシュアップ段階	26 9月13日	作品の制作、ボードの仕上げ ボード(ロゴお土産) 作品(ポスター) 企画書の制作	企画や作品の造形表現のブラッシュアップを行い、より完成度を上げる	09 企画書 (最終的な企画内容をまとめるワークシート)
	27 9月13日			
提案する				
アウトプット②	28 9月13日	最終プレゼンテーション 審査用ビデオの撮影	PR企画コンテストに向け、自分の企画の核となるメッセージが相手に伝わるよう、工夫したプレゼンテーションを行う	09 企画書 (最終的な企画内容をまとめるワークシート)
	29 9月13日			
全体のまとめ	30 9月13日	授業全体のまとめを行う	最終的なまとめとして、今まで行った活動についての振り返りを行う	アンケート用紙 (授業内容についてのアンケート用紙)

1. これまでに学んだこと・得られたこと・

企画化に向けたヒントは？

事前リサーチ課題① 飯山ってどんなところ？ から学んだこと・得られたこと・企画化に向けたヒントは？

事前リサーチ課題② 市場にあるデザインを調査しよう から学んだこと・得られたこと・企画化に向けたヒントは？

体験活動 から学んだこと・得られたこと・企画化に向けたヒントは？

2. これから企画化して発信したいこと

〈誰に？〉

〈何を？〉・・・伝えたい、感じてほしいメッセージは？ どんな飯山らしき、飯山独自の宝を取り上げる？

〈どんな形で？〉

ロゴマーク: 文字/イラスト/カタチ/モチーフ/キャラクターなどのイメージ・アイデア
 ポスター: メインビジュアル/キャッチコピー/ボディコピーなどのイメージ・アイデア
 お土産商品: 内容/スケッチ/スケール/材質/価格などのイメージ・アイデア

図 1. 教材例 (ワークシート 07)

3. 結果

ここでは本実践の結果を展開の様子ならびに受講学生によるアンケート結果、授業者による評価の3つの視点から述べる。

3.1. 教授学習過程の様子

5月に行われたオリエンテーションでは受講生は興味・関心を持って受講していた。体験学習の希望調査では食・農体験が最も希望者が多く、取り組みたい企画ではお土産が最も多かった。次に行われた5月の概念的インプット①では映画「阿弥陀堂だより^{vi)}」を鑑賞し、劇中で描写されている飯山の風土と都会との違いを整理することで、飯山を「ふるさと・田舎」と捉えた。そこから現代人にとっての価値や魅力についての考察を行い、次回の法政大学との合同ゼミに備えた。

6月の概念的インプット②では映画から見る飯山市をテーマに、専門の違う法政大学の学生とディスカッションを行うことで、自分たちの得意とすること(学んでいること)で出来ること(出来そうなこと)は何かを考え明確にした。

現地で行われた体験的インプット①ではカメラを手に市街地など観察し、興味・関心のあるものを積極的に撮影した。事前学習を基に、決められた時間の中で主体的に散策を楽しんで動く学生が多かった。続く体験的インプット②では飯山市の課題・現状・特産物、観光資源などを具体的に拝聴することで、具体的なアイディアソースとして受け止めている学生もいた。その後の課題に関するオリエンテーションでは、アウトプットメディアの特性や効果を理解すること、実際の作業プロセスを把握すること、また他地域の参考事例を知ること等により自分がどの表現でPRするかを考える手がかりとした。

さらに体験的インプット③(図2)では3グループに別れて、それぞれの地域資源に対して、楽しみながら理解を深めていた。伝統工芸体験では実際に紙すき・彫金を行うことで、モノづくりの面白さや職人の熟練した技術を体感した。食・農体験では民宿の女将のほがらかな人柄や土との触れ合いは、おばあちゃんの家に来たかのような開放的な感覚を与えた。自然体験ではネイチャークラフトやトレッキングを行うことで、部分的ではあるが自然の魅力を直接的に感じた。



図2. 現地学習の様子

発想段階に入りプランニング①では主に3日目の現地体験で行ったことを基に企画を立案する学生が多く見られた。4～5人の小グループで作業をすることにより自発的にブレインストーミングを行い、ラフスケッチを繰り返し、発想を広げた。そこからプランニング②では先の発想を企画にまとめた。発想した企画のコンセプトをブラッシュアップ、及びデザイン画の表現方法、作品の造形表現を検討した。満足のいくまで作業を終わらせず、夜遅くまで企画書作成を行う学生も少なくなかった。

現地でのプレゼンテーションを行ったアウトプット①では地元の関係者に向けてのプレゼンテーションに備え、自分なりに工夫し、発表内容を暗記している様子も見られた。短い準備期間の中で伝達すべき内容を整理しながら発表を行った。

そこから大学に戻りプランニング③として企画のブラッシュアップを行った。時間いっぱいまでのブラッシュアップ、また作品の見せ方に関する要望（ポスターをパネルに貼りたい等）も聞こえ、コンテストに向け主体的に取り組む学生の姿が見られる一方、時間を持て余している学生もいた。さらに最終プレゼンテーション（アウトプット②）では自主的にデザインモデルを作り積極的なプレゼンを行う学生がいる一方、企画素案と変わらない発表を行う学生もいるなど個人差が開いた。

また以下に、学生の取り組んだ企画（PRポスター・ご当地ロゴ・お土産商品企画）の代表的な作品を紹介する（図3～4、表2）。

3.2. 受講生によるアンケート結果

ここでは学内での最終プレゼンテーション終了の本授業のふりかえり時に学生に回答してもらったアンケート



図3. PRポスター代表作品



図4. ご当地ロゴ代表作品

結果について述べる。

「飯山に対するイメージ」（複数回答、図5）としては、都会での生活とのコントラストからか「自然が豊か」という回答が最も多かった。また「癒し」「伝統的

表2. お土産商品企画・作品一覧

おやまぼくち 本格派 蕎麦打ちセット	造形学部 3年
飯山特産のやまぼくちをつなぎに使用した蕎麦を自宅で簡単に楽しめるセット。レシピと材料が小分けに入っている。海外への通信販売も視野に入れた商品。	
いいやまご飯 (お茶碗とお米のセット)	造形学部 3年
飯山の温かさを象徴するおじいちゃん、おばあちゃんの絵を茶碗に施し、飯山の米づくりや風土をグラフィカルにパッケージに書き込み、飾りとしても楽しめる商品。	
Iiyama NO OYAKI	服装学部 4年
若い世代にも食べてもらえるよう意識した、アスパラガスやみゆきポークなど飯山の食材を詰め込んだ新しいおやきの提案。	
飯山の手作りおやき	服装学部 4年
若い女性を意識し、都内のデパートの催事などでも取り扱うことを念頭に置いた商品。商品の他に風景を載せたパンフレットを作成し、おやきを媒体として誘客を狙った。	
菜の花入りワンカップ	現代文化学部 4年
飯山の地酒に本物の菜の花を入れた商品。菜の花祭りの会場や、都内での販売する季節限定の商品。	
Iiyama WELCOME ASPARAGUS	造形学部 3年
茹でた飯山特産の「ウエルカム」という品種のアスパラガスを真空パックにし、手軽にスナック感覚で食べられる商品。パーキングエリアなどで販売し品種に加え「飯山にいらっしゃい!」という気持ちも込めた。	
わきあいあいいいやま	造形学部 3年
東京から遊びに来た若者をターゲットとし、飯山のおじいちゃん、おばあちゃん、自然をモチーフにした、会社や学校に配りたくなるような癒し系の人形焼き。高橋まゆみ人形館のお土産としても想定している。	
いいやま四季こよみ	服装学部 3年
飯山の四季折々の自然を楽しくする内山紙を使用したカレンダー。月ごとにその季節の葉や花びらを入れて塗り紙を使用する。また、その植物が見れる飯山の観光情報も入れ、飯山を知るきっかけを与える商品とした。	
森のペンダント	造形学部 3年
彫金の台座に飯山の植物を形どりし、飯山の風景写真、植物、和紙などを樹脂でコーティングしたペンダント。女性を対象とし、これ一つで飯山の伝統文化と風景を知る事が出来る商品を目指した。	
浴衣	造形学部 3年
宿や温泉などで使う浴衣に飯山市の自然風景を施し、備え付けるだけでなく、販売し、お土産としても持って帰れる、海外の方に向けた商品。	
ふるさとストラップ	造形学部 3年
飯山の伝統工芸品である内山紙、飯山仏壇の彫金の技術を使った若者に向けた商品。伝統工芸の技術を使い「ふるさと」「北竜湖」「あじさい寺」をテーマにそれぞれのマスコットをポップな表現で銅(彫金)と和紙を丸めたもので作り、繋ぎ合わせた。	
絵本「こうぞくにかみになる」	現代文化学部 4年
内山紙が出来る過程を「こうぞく」というキャラクターを使い、ストーリー仕立ての絵本として表現した。フリーペーパーとして全国の図書館をはじめとした子供のための施設に置くことで、内山紙を知ってもらうとともに飯山市をPRすることも狙いとされた。	
飯山 四季の絵はがきセット	現代文化学部 4年
飯山の四季の植物や特産品を押し花のようにして乾燥させたものを内山紙で塗り作ったはがきセット。	
トマトちゃん農作業グッズ	造形学部 3年
トマト柄の子供用農作業グッズ。手袋、帽子、長靴、エプロンをトータルコーディネートすることで、子供のやる気を引き出し、農作業を楽しく手伝うことの出来る商品。	
雪の雫	造形学部 3年
飯山の名産「幻の米」2合と飯山名水「腹薬清水」を360ccセットにした、自宅で手軽に味わえるおいしいお米のセット。手に取りやすく試しやすいサイズにすることで、お土産として買いやすい商品を目指した。	
ブナの森の白しやもじ	造形学部 3年
鍋倉山のブナ原生林に注目し、その特徴的なブナの葉のカタチをモチーフにしたしやもじ。飯山の特産のお米をこのしやもじでよそって食べてほしいという思いから企画した。売り上げの一部をブナ林の保全のため使う。	
あすばらがす。	現代文化学部 4年
飯山特産のアスパラガスをそのままのカタチでスナックとした商品。形状のユニークさを売りとし、実際に店頭と並ぶ生のアスパラに見立てたパッケージとした。	
いいやま 食べ歩き七福神おやき	造形学部 3年
七福神のいる場所にそれぞれ異なる味の異なるおやきを販売し、食べ歩き楽しさをテーマとした商品。おやきの表面には七福神の焼き印を押し、見た目も楽しめる。	
iiyama マイボトル	現代文化学部 4年
山にトレッキングに行った際に天然水を汲むためのタンブラー。森林セラピーの基地である「森の家」などでの販売を想定している。お土産として持ち帰ったあとは普通のタンブラーとしても使用できる。	
黄色のタルト	現代文化学部 4年
本物の菜の花を使った色鮮やかなタルト。春の菜の花畑をタルトで再現する。	
おうちで TRY ! 彫金体験セット	現代文化学部 4年
飯山の伝統工芸の彫金を自宅で体験する事の出来る道具と材料が入ったキット。携帯のストラップ、キーホルダー、酒瓶のネームタグなどが出来る。手作りの良さや彫金作業の楽しさを広める事を主旨とした企画。	
やまのぼり DE シュシュ	造形学部 4年
若者や子連れ親子を対象とした商品で、和紙と彫金を施したチャームで出来ている。伝統工芸品を身近にした。手軽に購入出来る事に加え、旅行先で「お揃い」のモノを身につけることによりさらに旅を楽しく、親睦を深めるためのツールとして考案した。	

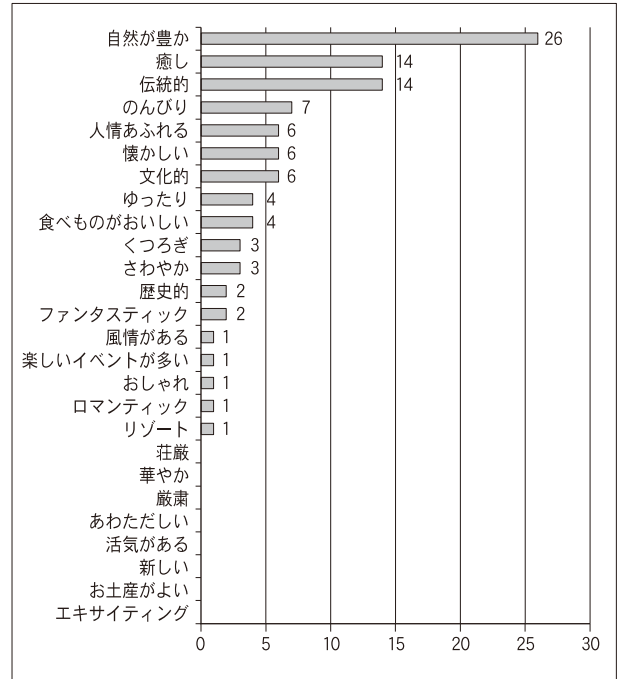


図5. 飯山に対するイメージ

「のんびり」など直接的な体験に基づいたと思われる回答が続いた。一方「風情がある」「楽しいイベントが多い」「おしゃれ」「ロマンチック」「リゾート」などのイメージは本授業での体験ではほとんど共感できなかったと思われる。

次に「現地学習を行って良かったと思う点」(複数回答、図6)については、「良い経験になった」「楽しかった」「飯山の魅力を改めて知った」などの体験に基づく感想や印象が多かった。一方で「良い交流になった」「自分のアイデアが地域のためになる」「飯山の課題に改めて気づいた」などの回答が少ない結果となった。

「授業によって変わったこと、発見したこと」(図7)に関しては、「田舎暮らしについて以前より肯定的なイメージを持つようになった」や「家族や友人に自然のすばらしさを話したいと思う」などが高い結果であった。しかし「地域社会での人の繋がりを考えるようになった」「地域資源を探したり、調べたくなった」などの主体的な行動を伴うような変容は低い結果であった。

また「循環社会や地域社会について」(図8)については「地域社会で暮らす人びとのことを考えるようになった」「自然や環境について考えるようになった」など対象を身近に捉える肯定的な回答が高かった。ところが「将来飯山に住みたいと思う」「自分の郷土について考える機会が増えた」などは肯定的な回答が低く、否定的な回答が高い結果となった。

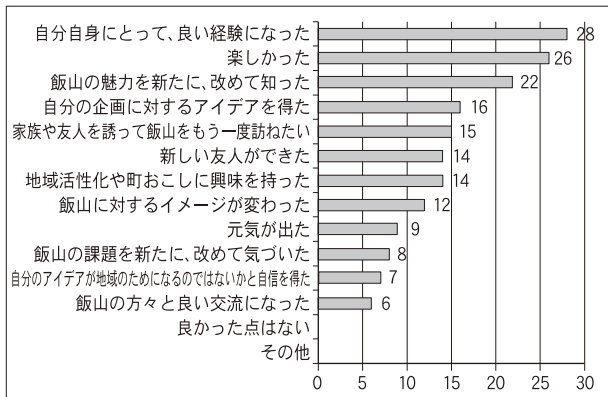


図6. 現地学習を行って良かったと思う点

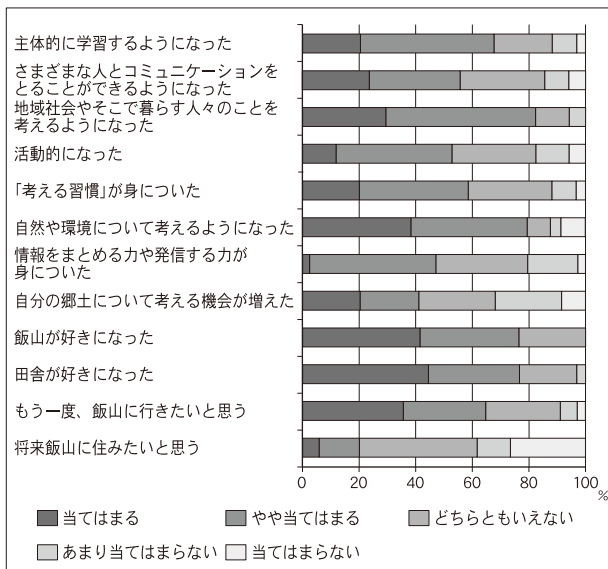


図7. 授業によって変わったこと、発見したこと

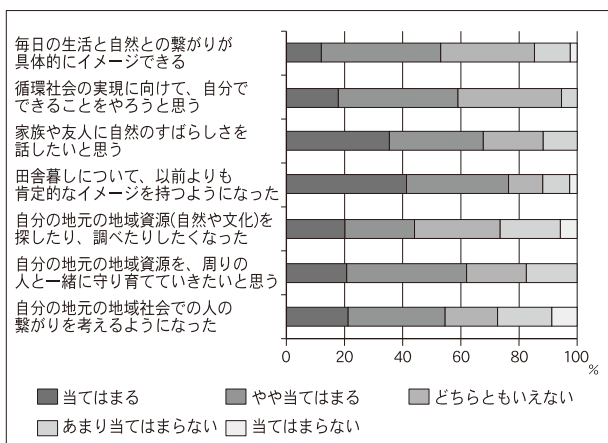


図8. 循環社会や地域社会について

また「本授業に参加して」という受講全体に関する質問では、受講生全員が肯定的な回答を示した(図9)。

このほか授業を受講してみたの感想を自由記述で聞いたところ、表3のような回答が見られた。

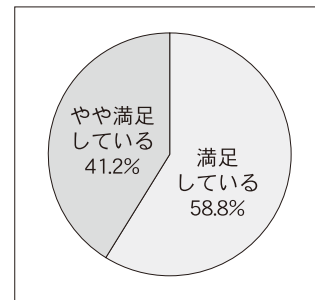


図9. 授業に参加して

表3. お土産商品企画・作品一覧

何も知らない飯山について何かを考えるということは、難しいなと思っていましたが、さまざまな活動を通してとても楽しくお土産を考えることができました。(4年)
行ったことのない町のことを他の人にPRすることを考えるのは難しかったけど、授業が進むごとにPRしたい気持ちが増え、自分のふるさとのように思えた。(4年)
町おこしの企画を行うという本格的なデザインの企画、プレゼンをするを前提に行った体験プログラムは普段の旅行などでは味わえないものとなった。(3年)
飯山を楽しめただけでなく、企画をすることで自分の地域に対する考え方が変わったり、発想力を強くすることができたと思う。(4年)
デザインするということが、地域を盛り上げようとする等、自分のやることに対して正面から向き合えた気がします。(4年)

3.3. 授業者による評価

ここでは先述した教授学習過程の様子を踏まえ、授業者の立場から授業の到達点を述べる。

最初のオリエンテーションでは授業内容、地域連携活動、全体スケジュールの理解が進み、本年度も商品化の可能性があるとPRコンテスト参加への動機付けとなった。

概念的インプット①ではパンフレットやウェブサイトだけでなく、映像で飯山を見ることでより具体的な地域イメージの理解に繋げることができた。また概念的インプット②では既に一定程度の成果を上げている同世代の小島ゼミの学生と交流を持つことで、飯山市についての理解を深め、地域で活動することの興味や意識を高めた。一方、事前学習への参加意識が十分ではなかったため、ディスカッションでの発言が消極的な学生も見られた。

現地での体験的インプット①では見学・散策を通し、まちの様子や雰囲気をすることで地域理解への足がかりとなった。次の体験的インプット②では信州いいやま観

光局から飯山の現状を聞くことにより、飯山市の地域課題を現実的に身近なものを受け止め、その後立案する企画への意識を高めた。そこから課題についてのオリエンテーションでは課題説明や参考事例を理解することで、作品づくりのプロセス・イメージを具体化させた。そこでは作業フローについて説明を受けることで、実際に行う作業内容を具体的に理解できたと考える。またデザイン発想法の説明からはモノづくりの手がかり、参考事例の提示では視野、発想の幅を広げることに繋がった。

体験的インプット③において、地域資源を活かした体験活動を行うことにより、地域をより身近に感じることに加え、共通の体験を通し学生同士の輪も広がった。また、それぞれ違う体験を行った学生が楽しかった思いや魅力、仕入れてきた情報を共有することにより間接的にもそれぞれの資源について理解、知識を深めた。伝統工芸体験では体験を行うことで今まで遠い存在だった伝統工芸を身近に感じ、またその魅力と奥深さ、発展性を実感した。食・農体験では農村の空間や女将の人柄に対する共感的理解は「また来たい」といった形でその地域に対する愛着をもたらした。自然体験では飯山のブナ林と関東の生活が水資源という点で繋がっていることの理解など、より主体性を持って捉えることができた。

その後の発想段階であるプランニング①ではアイデアの段階で多分野（造形、観光、歴史、教育）の教員からアドバイスを受けることにより、自分の方向性をより確実にし、企画の完成度を上げた。体験から日が浅いため、企画を起こすまでに十分に体験を咀嚼し、そこに内包される価値や問題点を理解するには至らず、表面的な表現になりがちな学生が多かった。そこから企画づくりを行ったプランニング②では作品を作り上げることの達成感や同じ課題に取り組んだ友人との連帯感を生んだ。体験に基づいた発想からコンセプト立てをしっかりと行うことで企画内容、造形表現のブレを少なくした。学部学科や専門で学んでいる領域の違いに関わらず、熱心に作業をしている姿が多く見られ、相乗効果で全体的なモチベーションの高さに繋がった。

さらにアウトプット①では相手に伝えることで、自分の意見まとめ、コンセプトを焦点化した。また人のプレゼンを聞くことによりそれぞれの視点での発想を知り、視野を広げた。地元の方から直接意見をもらい、企画の発展に繋がった。時間的制約からか、企画の作り込みといった作業段階から、どのように発表するかという変換

が追いつかず、プレゼンテーション（提案）というよりは、インフォメーション（報告）に留まってしまう学生も見られた。

最終的な仕上げとなるプランニング③では特にPRポスター、ご当地ロゴのグラフィック表現において完成度を上げた。現地学習から数日経過したことで、向上心を持って作業を行う学生と、最低限の作業で済ませようとする学生とに二分化した。その後のアウトプット②に関しては、それぞれの作業プロセスや完成形の企画、作品のプレゼンを聞くことにより、お互いの知識や考え方を理解した。

4. 考察

4.1. 教育目標に対する到達度

本実践の到達度については、カリキュラム全体に係る教育目標と教育内容、教材との関係性に照らし合わせて考察する。先の教育目標は1) いくつかのインプットにより飯山の地域特性を理解すること、2) 地域課題に基づくPR企画の提案であった。

1) に関しては、学生のアンケートなどにもあったように体験的インプットの楽しさや地域の魅力の再認識など、肯定的に飯山の地域特性を理解することができたと考えたい。それは体験的インプットが文字通り、実体験を伴った活動であったことに起因していると考えられる。またそれらが学生にとって新たな発見を伴うものであったことは、それらが教育的価値を有していたと考える。

2) 最終的に出来上がった作品を見ると、どれも事前学習や現地学習でのインプットにヒントを得たものであった。このこと自体は両インプットが企画に結びついていることを示している。しかしながら、本実践のねらいとしては概念的インプットおよび体験的インプットによる地域特性の理解から、自ら地域課題を発見し、その解決のためのプロセスを内包した企画を提案することにある。その意味において、全ての企画は飯山の地域特性を反映させたものであったが、地域課題の解決といったコンセプトを反映させた企画は僅かであった。

4.2. 今後の課題

今回の学生の提案した企画を見ると、体験で味わった感動や良さを直接的に伝えたいという企画と、それらを一度地域課題と結合させた上で課題の解決にアプローチする企画とに大別できる。前者の企画を立案した学生達は体験学習段階から発想段階へ、そして企画段階へと学

習を展開させる中で、自らの興味・関心に基づいた独自性のある地域課題を認識することが十分ではなかったと考えられる。したがって本活動において、このように体験の魅力を伝えるに留まる企画は、先に述べた「地域の持続性」確保への貢献と「地域社会に対する問題意識と公共心の涵養」という目標を達成するためには十分ではないと考える。今後の授業展開に当たってはその原因となる教育内容、そして教材の系統性と適時性を精査する必要がある。これに限らず教育内容と教材に関しては、教育内容の理解や習得の様子と教材との相互関係の中で、より精緻な検証が必要であると考えられる。

また本研究は授業評価という点では、学生の作品のみならず作品の地域社会での反応や評価など、量的にも質的にもしっかり評価しなければいけないと考える。従って今後は評価方法の検討と合目的な評価の実施を課題としたい。

一方、授業方法についてであるが、八重樫らはデザイン教育における学習活動の最も特徴的な要素として、1) 問題自体を学習者自身が探究する形態をとる。教師はそのプロセスを一緒に歩くガイド役であること、2) 活動の成果物のみでなく、そのプロセス自体が常に学外・社会に開かれ、他者と共有できるような環境を実現していること⁵⁾を指摘している。このように教師に求められる役割の検討や、より十全なグループ学習の実施などを課題としたい。

まとめ

文化学園大学 USR 推進室における活動の1つに長野県飯山市との地域連携事業があり、ここでは2010年度より学生の専門性を活かした教育活動を展開している。本研究では本稿(1)の報告における2011年度の活動のうち、本学コラボレーション科目として実施した教授学習過程に焦点化し、そこでの教材編成と授業の検証を目的とした。2010年度の活動を踏まえ、飯山における学習モデルの中からより合目的なプログラムを抽出するとともに、従来授業外の自主参加という形式で行っていたところをコラボレーション科目化するなどいくつかの視点で教材編成を行った。それらの展開のち学習の成果や様子、授業アンケート、授業者による評価などを統合し授業全体の評価を行った。その結果、学生は授業参加そのものを肯定的に捉えており、学生にとって馴染みのない飯山の地域特性の理解が肯定的に行われたこと、地域特性の理解が作品のアイデアとして反映された

ことが成果といえる。しかしながら、地域理解と地域課題の連続性での企画作りが不十分であったことによる学習のつまづきや、授業評価の方法として地域からの反応や評価などその対象を広げるべきことなどが課題として明らかになった。

今後は本研究の成果と課題を踏まえ、授業の成否を左右する教育内容と教材に関して、飯山における地域課題と学生の専門性の接合面の中で追求し、本プロジェクトを展開していきたい。

註

- i ここでの構想カリキュラムとは本稿(1)の「授業を計画する段階で、教師が頭に描く見取り図」に依拠する。
- ii 本論では学習内容と教育内容を同義のものとして捉え、教育内容と表記する。
- iii コラボレーション科目とは文化学園大学の卒業必修科目で、例年80~100ほどの科目が3~6日程度の集中講義形式で開講されている。学生は学部・学科を超えて自由に選択し履修することができる。
- iv 体験のインプット③は本稿(1)でまとめた教育資源の体験的な学びであり、その枠組みは「観察・見学・調査・飼育・奉仕活動・勤労・創作・モノづくりなど、体全体(五感のすべて)を使って対象に働きかける学習方法・形態」(新版学校教育辞典、2003、教育出版、pp491-492)に準拠することから体験学習として捉える。
- v Gilbelsら(2005)によるとグループ学習を「学生がグループになって議論を行い、互いに分業しながら体験的に学んでいくことで、さまざまな知識を学生が主体的・能動的に理解し、問題解決課題を学習する授業形態」と規定し、グループによる協同的な学びに力点を置いている。
- vi 映画「阿弥陀堂だより」は飯山市を舞台とした作品で、2002年に公開された。主人公夫婦が飯山の自然の中で暮らすことで、再生されていく姿が描かれている。

引用文献

- 1) 柴田義松(2010)「柴田義松教育著作集5 授業の基礎理論」学文社、184
- 2) 高村泰雄(1976)「日本の教育6(教授過程の基礎理論)」新日本出版、41
- 3) 高村泰雄(1976)「日本の教育6(教授過程の基礎理論)」新日本出版、42
- 4) 山崎英則・片上宗二(2003)「教育用語辞典」ミネルヴァ書房、468
- 5) 八重樫文・佐藤圭輔(2011)「プロジェクト学習(PBL)の授業設計・実践における背景理論とその評価」立命館高等教育研究11号、183-198

参考文献

- 1) 栗山丈弘・田中直人・山崎裕子・森谷直樹(2012)「大学と遠隔地との地域連携教育の実践(1)―文化学園大学『飯山地域連携プロジェクト』の展開と可能性―」、文化学園大学服装学・造形学研究第44集

- 2) 古屋栄彦ら (2011) 「プロジェクトデザインと創造実験の試みとその教育的効果」、KIT Progress No.19、221-230
- 3) 出原立子・伊丸岡俊秀 (2011) 「産官学連携による地域社会の価値を創出する教育」、KIT Progress No.19、61-70
- 4) 菊地直子 (2003) 「体験学習サイクルを用いた授業の試み実践報告 1」、仙台大学紀要 Vol.35, No1, 15-21
- 5) 丸山一彦 (2007) 「富山県における地域ブランド創造に関する実証的研究～顧客を富山県に誘発するお土産品からのアプローチ～」、富山短期大学紀要第四十三卷 (一)、33-47
- 6) 美馬のゆり (2009) 「大学における新しい学習観に基づいたプロジェクト学習のデザイン」、工学教育 57-1、445-50
- 7) 岡村泰斗ら (2005) 「体験学習法を応用した体育授業が学習者の内発的動機付けに及ぼす影響」、奈良教育大学紀要第54巻第1号、93-101
- 8) 高野雅夫「体験学習型基礎セミナー「地球環境塾」の試み—持続可能な社会構築のための大学教育のあり方を求めて—」、名古屋高等教育研究第5号、35-47